

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 西谷 修



学位申請者 渡辺一史

論文名 フェルナンド・ペソア研究——ポエジーと文学理論をめぐって——

[審査結果要旨]

本論文は、20世紀前半のポルトガルに生き、没後半世紀を経て世界的に知られるようになった作家フェルナンド・ペソア（1888-1935）の、特異で謎めいた著述活動の意味を、作家初期の1912年から1918年の活動に焦点を当て、詩と評論の読解によって包括的に解明しようとしたものである。それはペソアが、ポルトガル近代の独特の運命を意識しながら、国民意識の表現をめざす文学と普遍的なモダニズム文学という二つの潮流の交差する場に身を置きながら、しだいにみずからの表現の独自の在り方を、詩の実作と理論的展開の両面から練りあげてゆく時期だった。ペソアがポルトガルの「近代」にどう向き合い、その独自性を引き受けるためにどのような理論的探究を行い、それを「感覚主義」と規定される方法的な詩作（ポエジー）によって表現へともたらしたのか、そしてそれを新たな「パガニズム」としてキリスト教的伝統からの異化をはかったのか、そのすべてを何人もの詩人や批評家を「異名」として生み出し、その関係のなかにみずからも身を置くことで実践した、前代未聞の「複数性」とは何だったのか、そうした問いに導かれて、渡辺君はペソアの理論的著述と詩作品を並行して精緻に解読し、その照応を跡付けて、この異貌の作家の文学的営為の核心部分を描き出すのに成功している。近年世界で広く論じられるペソアだが、多くの論は部分的なものか、印象批評の域にとどまるなかで、おそらく本論文はペソアの著述活動の核心に踏み込み、それを真正面から包括的に論じた前例のない論文であり、その点と研究の達成度を高く評価し、審査員全員一致で本論文が博士号授与に十分に値するものとの結論を得た。

[論文概要]

論文は本文311ページ、二部構成で、第一部は「実在／非実在のポエジー——フェルナンド・ペソアの原初的ポエジー」、第二部は「感覚／繁殖のポエジーとペルソナ」、各部はそれぞれ三章からなり、

第 I 部

第 1 章 あたらしいポルトガルのポエジーの開く詩的次元

第 2 章 汎神論的超越論

第 3 章 神の概念形成

第 II 部

第 1 章 感覚のポエジーの生成

第 2 章 〈感覚主義〉の感覚様態と〈異名〉現象の発現

第 3 章 〈ポルトガルのパガニズム〉世界—あらたな思考のパラダイムとしての宗教形態となっている。そして各部にそれぞれ仮の結びとして、「ペソアのパエジーの原初形態」、「〈感覚主義〉を本源とする「主要な」異名の存在意義」が付されている。

本論全体で扱われるのは、ペソアが南アフリカからポルトガルに帰還し、共和制成立時に勃興した国民主義的文学運動「サウドジズモ」に共感を寄せ、その中心的雑誌『鷲』に寄稿を始めた 1912 年から、やがてそれと袂を分かちモダニズム詩人たちの共感を得て雑誌『オルフェウ』刊行に関わり、独自の「感覚主義」の理論化と実作を「主要な異名」を生み出しながら行うに至った 1918 年までの著述である。

第 I 部ではまず、20 世紀初頭のポルトガルの文学潮流、とりわけ「サウダーデ」の感情を核にポルトガルの「ナショナルな魂」を顕揚しようとした「サウドジズモ」の運動と、ペソアの関心との並行関係が論じられ、とりわけ、運動の主導者パスコイアスの詩論の与えた影響が検討される。

次いで、この潮流の雑誌『鷲』に相次いで発表されたペソアの「あたらしいポルトガルのポエジー」をめぐる 3 篇の詩論が、それぞれ力点を変えて練り上げられる後をたどって仔細に論じられる。だが、サウドジズモの主流のように国民詩人カモンイスを過去の絶対的典拠にするだけでなく、表現の革新によって「あたらしいポルトガルのポエジー」を創出しなければならないと考えたペソアは、描写の客観性と表現の主観性とが並び立ち、物質性と精神性とが相互浸透して、ある宗教性のうちに統合されるような詩的表現を求め、「スーパー・カモンイス」の到来を予告するが、その理路がここで明らかにされる。

この志向は、ペソアにとって単に詩的表現の問題ではなく形而上学の問題でもあり、精神と物質の二元性を超え、またその双方からの一元化の試みを超えて、精神と物質の二つながらの実在性を肯定しつつ、それを感受＝認識の次元で受けとめてゆくペソア一流の「汎神論的超越論」の展開と不可分であることが、実作の分析を通して示される。

さらに「実在と非実在（物質と精神）の非両立状態を両立させる事象総体」を表現にもたらすという、このポエジーと形而上学との照応は、理性を拒否しないどころか徹頭徹尾理性的でもあるある種の「信仰」とも不可分で、その「信仰」にとって詩は、啓示ならざ

る啓示として言葉を通して開示される「神＝彼岸」としての意味をもつことが示される。

ペソアは「ポルトガル精神」の核に、ローマ教会とは一線を画してパガニズムの要素を保持したルシタニア教会の伝統を見ていたが、そこから引き出される「非制度的キリスト教」の在り様がそこで示唆されることになる。

第Ⅱ部では、以上のペソアの意図と傾向が、保守的・伝統的なサウドジズモの担い手たちの意向と齟齬をきたし、むしろそれと敵対してフランスやイタリアの影響を受けたモダニズム詩人たちの共感を呼び、雑誌『オルフェウ』の刊行に関わって、みずからの立場を「感覚主義」として打ち出し、その理論化といくつもの「異名」による実作とを展開する局面が扱われる。

まず、ペソアの詩「沼地」に共感したモダニストたちによって名づけられた「パウリズモ」、あるいはペソア自身が、フランスのキュビズムやイタリアのフュチュリズムを批判的に参照しながら規定した「交差主義」が、いかなる表現様態として意識されていたかが検討され、それと対比しながら、以前は否定的に捉えられたフランス象徴主義が「夢想の芸術」として再評価され、ペソアの詩的思考にしだいに輪郭を与えてゆく過程が跡付けられる。また、実在と非実在の両立を可能にするこの「夢想の芸術」が、夢という超越論的現実を顕揚する点で「汎神論的超越論」に結びつくものであり、逆にまたそのような志向を抱える限りで、ペソアの意図とモダニズムとの間にも大きな深淵が横たわっていたことが示される。ここでは、それを体現する劇詩「船乗り」が印象的な手つきで分析されている。

次いで、ペソアがたどりついた「感覚主義」の「感覚」とは何であるかが論じられ、その多面的でそれぞれ独自の「感覚」の様態がひとつひとつ「人格化」を要請すること、そして次々と「異名」の詩人や哲学者が詩作と思索を通して生み出され、それが一群の「感覚主義」的表現のコンステラシオン（星座）を構成することが示される。とりわけ「解き放たれた感覚することの飢え（渴望）」を体現する異名アルヴァロ・デ・カンポスの長編詩「海のオード」、そして生れ出るとともにペソアの師と位置づけられることになる異名アルベルト・カエイロの自然詩「群れの番人」が分析され、「感覚」の多様な局面が示されるとともに、その「感覚」の言語化と哲学的言説との関係が解明される。

そして最後に、被造物が創造者を生み出すがごとき「異名」のコンステラシオンが、それぞれに独立したとみなされたその配置によって、制度的キリスト教の枠組みを超えた「ポルトガルのパガニズム」の世界を表象し、それ自体である宗教的世界をパフォーマンス的に実現していることが論じられる。結論部は、以上の論議をふまえてペソアの詩的営為の意味をまとめている。

審査にあたったのは、本学イタリア近現代文学の和田忠彦教授、モダニズム芸術研究の松浦寿夫教授、ポルトガル語史の黒沢直俊教授、そして学外から哲学・フランス文学が専門ながらペソア詩集の邦訳者でもある立教大学の澤田直教授、主査はフランス思想・グローバルスタディーズの西谷である。

審査会では、まず審査委員から一様に、検討の対象となる時期が限定されているものの、本論はペソアに関して類例のない本格的かつ包括的な研究であり、その詩作と理論、そして独特の「異名」との関係を、理論的テキストと詩作品双方の綿密な読解を通して十分説得的に明らかにした点を高く評価するというコメントがあった。

その取り組みに専心するあまり、随所に表記や形式についての瑕疵が残っており、その点に関しては一様に注文がついたものの、上記要旨でまとめたこの論文の内実については一致して高い評価が与えられた。

また黒沢教授からは論文中に引用された少なからぬポルトガル語の詩作品に関しても、わずかな誤解をのぞけばきわめて正確かつ適切な訳であり、その文献渉猟も信頼に値するものであるとの評価があった。

広く注目され関心を呼びながら、その無類の「分裂」ないし「複数性」、そしてナショナリズム的側面とモダニズム的傾向との両義性、さらには晦渋をきわめる形而上学的思索のために、ペソアを包括的に捉えることは難しかったが、ヨーロッパの辺境に位置し、それゆえに「近代」の先駆けとなりながら、いつの間にかまたその「ヨーロッパ近代」の蝕に入ってしまったポルトガル、その「ポルトガルの近代」という特異な運命を担いとり、その特殊性のすべてを逆に唯一無二の特質として、あたかも非実在を実在と共存させる次元を作り出してそこに転位させるかのように、文学表現と思弁のうちに表明しようとしたこの詩人の営為を解明した論文は、そこに連鎖する 20 世紀ヨーロッパの、ということは 20 世紀世界全体に関わる、政治と文化のさまざまな傾向や課題を逆に照射するような潜在力を秘めており、それが審査委員たちにも大きな刺激を与えることになった。

また指摘された主な問題点は、

- 1) 本研究の対象時期を 1918 年で区切ったことの原因が明確でない。
- 2) モダニズムに関して、その汎ヨーロッパ的射程を十分測定するに至っておらず、それがモダニズムの検討部分の議論を狭めたきらいがある。
- 3) 全体としては十分な論議を展開し得ているが、ペソアがサウドジズモの運動からモダニズムに移行する時期のポエジーと理論の変遷が、時間的展開を伴うにも関わらず、その分節が十分明確に記述されていない。
- 4) ペソアの哲学的議論を扱う際に、訳語の選択や諸思想の関連付けなどで専門知識の不十分さがうかがわれる個所がある（たとえば「実在」の訳語の選択や「感覚主義」とフッサール現象学の発想との関係など）。

5) ペソアが登場する時代のコンテクストや、20世紀初頭のポルトガルが抱えていた問題、論者が主な研究対象とした時期の特別な政治状況などが十分に触れられておらず、その結果、ペソアの特異な著述活動のもったであろう時代的意味が後景に退くことになり、結論でまとめられたペソアのポエジーと思想のもつ現代的意味に言い及ぶ機会を逃している。

といったことだが、論文全体はそれらの部分的な欠点を補って余りある充実した内容をもっており、これらの指摘は今後の課題となる。また、それぞれの指摘に対してなされた論者の応答は、長年の研鑽によって培われた知識と理解の蓄積を十分に感じさせるものであった。

以上のことから、審査委員一同は渡辺君の論文がペソア研究の一段階を画する優れた貢献であることを承認し、全員一致で博士の資格を授与するに値する業績であると認定するに至った。